

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.17)

### 「礼儀正しい言葉は、労少なくて益多し」

・・・謙譲の美德？・・・

先週に引き続き2日間、一日5時間、述べ1コースあたり10時間を越える講義を、メキシコでも有名な国立工科大学の若い研究者を相手におこなった。講義活動自体、前回の滞在から2年ぶりの実施のうえ、博士も混ざった高学歴者を相手なので、本人は初心者と同じ実態で、緊張を強いられる講義であった。

ゴルフに例えると、ダフリ(絶句)、チョロ(つかえつかえ)、トップ(上滑り)、パット決まらず(押さえどころの悪さ)の、お馴染みのゴルフスコア崩しスタイルと似た態様の、オンパレードだと思っている。

2日間配属先を留守にして、講義を行なって戻ってくると、前の経験のときもそうだが、職場の責任者なり周囲の人が、「講義はどうだったか？」と、私の講義の出来栄をを必ず聞いてくる。

このことを聞いて、その後どうこうするというのではないのだが、配属先でも、講義を設定した手前、自分の所の評判を落としたいから心配なのだろう。

この問いに対して、私は日本人の謙譲の美德の精神？を發揮して、「まあまあだ」に相当すると思われる、「**más o menos**」(マス オ メノス)と答えていた。

すると、必ず、「どうしたの?」、「何かうまくいかなかったの?」などと問い返される。私の答えの感覚としては、講義後実施する、講師、教材、授業態様などに対する、参加者の評価アンケートから、妥当だと思う回答をしたつもりが、彼女らの感覚としては、30%くらいの成功確率にしかとらえていないのではなかろうか。

そこで講義の雰囲気の説明すると、「なあんだ」と安心したような顔つきになり、ある人からは「ソレならば、成功だったのだろう」といわれ、謙譲の美德というものを説明したが、細かいニュアンスを伝えるににくいこともあって、いまひとつ理解できないようであった。

ここには、自分の考えをはっきり言う、自己主張の国民性あるいは、大層なお国自慢や、挨拶時などには、必ず派手な褒め言葉を交わす国民性など、すべてが融合したものが混じっているのではないかと思う。

街の小食堂などで食事をしていると、店の親父が寄って来て、「どうだ、メキシコ料理はうまいだろう」などと話しかけられることが多いが、「まずい」とか「まあね」などと答えようものなら、実際はそんなことはないのだが、ぶん殴られそうな雰囲気があり、無難に、「ウン！非常にうまいよ」と答えざるを得ない。すると、安心したように、また料理のお国自慢を始めるのである。

あるガイドブックに、「海外で女性を褒めるときは、服装でも料理でもオーバーなくらいがちょうどいい」というような記述があったことを思い出したが、スムーズな人間関係や会話を弾ませるためには、否定的な答えよりもどちらかといえば、肯定的な答えをして居れば、世の中が万事うまくいくというものだろう。



イラストの元は、他の資料から借用し、加工した

このこととはちょっとニュアンスは違うが、前のときの経験だが、言葉に関してこんなこともあった。地方の国営研究所に講義に行ったとき、配属先から随行してきた女性と肩を並べながら、講義会場から宿泊先のホテルへ帰り道すがら、生憎と雨になってしまった。

傘も持っていなかったので、日頃の私なら、「チェ！忌々しい」と言うところなのだが、同行の女性に、「¡ Qué romántico !」(ケ ロマンティコ、何と、ロマンティックだ！)とささやいたところ、普段は無骨な老人が気の利いたセリフ(と、本人は思っている)を吐いたものだから、気のせいかな彼女は、雨に濡れた顔を一瞬うつとりとさせて、ボラッチョ・ボニート氏の顔を見つめたように感じた？

一人の男と若い女性の二人旅の旅先で、映画や小説のワンシーンと同様、その後の心をときめかすような展開・・・残念ながら何もありませんでした！！出張から帰宅後、このことをワイフに話したら、「日本語では、恥ずかしくてとても言えないわね」と大笑いされてしまった。

謙譲の美德と国民性の違いを考えていたら、「Cortesía de boca, gana mucho a poca costa」(コルテシヤ デ ボカ ガーナ ムーチョ ア ポカ コスタ と発音し、意味は表題のとおりである。)という諺を思い出したので、表題に使ったのである。

この諺も穿った取り方をすれば、口先だけの丁寧さを冷笑していると解釈できなくもない。巷間言われている、関西の某地域の、「上がって、お茶づけでもどうですか」といわれて、「そうですか、それではお言葉に甘えて」などと承諾すれば、「何と凶々しい、デリカシーがないわね」となるような、言葉のやりとりを連想させられるような諺でもある。

私はこの手の口八丁の高級テクニックは、苦手のため、過去の社会生活では、辛酸をなめてきたことが多いが、反対に、手八丁の人に対しては、時には尊敬を大いにすることもある。

かように言葉というものは難しい。ボラッチョ・ボニート氏は諺を素直に解釈して、普段は、「不言実行」こそ男の美学だと思っているが、メキシコ人に対して、少しは自己自慢を交え、しかも矛盾の論理だが、謙譲の美德を兼ね備え、礼儀正しく話すよう心がけようと思ったのである。

もっとも、それを完璧に実行するには、先立つものは、スペイン語の会話力におうところが多いのだが。(こりや、絶望だ！)

(2009年8月6日、アンケート結果に一喜一憂しながら)



講義風景